

沈黙する巖本善治

— 憧れと侮り —

葛井 義 憲

一 島崎藤村の「巖本善治像」

毀誉褒貶はその人物の魅力・活躍に対して表れた世評である。そしてその毀誉褒貶はその人物に関して種々の「浮説」を生じさせることが縷々ある。それらの「浮説」はその人物の虚像化を進め、変転する情況如何によって、その者への賛美を大きくし、また、深い傷をつける侮蔑ともなる。巖本善治(1863年～1942年)はそうした「浮説」の渦に巻き込まれた人物であった。巖本の晩年に交流した文学者塩田良平は『近代日本文学論』(萬上閣, 1935年)で、彼の一生を「潔癖」という言葉で言い表している。「彼の一生を通じての態度は潔癖ともいはるべき真摯の二語なり。女子教育に没頭せるも、其潔癖性により、女子教育を棄てたるも夫^{それ}による。而して、其人生態度には常に、一貫せる価値的規準あるを見る」(134頁)と言う。

明治2, 30年代の言論, 教育, 社会改良, キリスト教の世界で甚大な指導力を表しつづけた巖本は20世紀という新しい時代を迎えた頃、自らが担ってきた役割を終えようとした。彼は発行兼編集人の雑誌「女学雑誌」で人間の尊厳, 女性の自立, 教育の重要性を説き、また、正義と隣人愛をもって社会悪を暴き、その除去・改善を求め続けたが、この「雑誌」の発行兼編集人を良き協力者であった青柳猛(有美)に1903年12月に譲った。また、生徒たちの個性の尊重と自由と可能性の開発を中心に据えて

教育活動を展開した明治女学校の校長を1904年4月に辞した。彼が掲げて取り組んだ「自由, 独立, 個性の尊重」などが陽の目を見る大正デモクラシー期到来の前に、彼は言論界, 教育界, キリスト教界の第一線から退いていった(拙著『巖本善治—正義と愛に生きて—』朝日出版社, 2005年, 163頁)。巖本にとって、人間が持つ「人生の価値と目的」は「人, 其の生れたる国と、活ける時代との為に其の現在の要求に応じ、最とも善しと信ずる所の事を断行する」(『女学雑誌』第516号女学雑誌社, 1903年, 2頁～3頁)だけであった。彼が「最善を尽く」して関わった濃尾地震の救援活動, 鉦毒に蝕まれた渡良瀬川とその沿岸地域の蘇生への取り組み, 廃娼運動など瞠目驚嘆させられた隣人愛に基く社会活動も日露戦争を眼前にした明治国家の中で継続できず、自らの非力と社会的役割の終焉を痛く知らされいった。

塩田はこの私利私欲の少ない、淡泊な人生を刻む彼の内に「潔癖」という言葉を見出し、また、彼が終生、親しんだ人々や書籍のことを知り、改めて彼の誠実な人間性を確認させられたと思われる。青山なをは大著『明治女学校の研究』(慶応通信, 1970年)に巖本が交流し続けた友人たち、ひも解きつづけた書籍類の名を知らせる塩田宛の巖本書簡を収めている。それは以下の文章である。

「明治二十年以前ハ「ジョンスチウワードミル」。ウェーランド(モーラル, サイエンス)。

二宮尊徳ノ報徳記（茗溪ノ図書館ニ一部アリシ丈）。スマイルスのセルフヘルプノ類ノミニ感化セラレシガ、明治十九〔巖本は明治十六年四月、木村熊二より受洗した〕年基督教ヲ信奉シ且ツ札幌農学校の宮部金吾博士、新渡戸稲造博士、内村鑑三、渡瀬庄三郎博士等ト交リ、又小公子ノ訳者タル吾妻若松しづ子によりて多く西洋文学書ニ接して心境ニ変ヲ覚シガ尤モ愛読セシカーライルとエマソンなりき」（666頁）と。

ここには、彼を支えた児童文学者の妻若松賤子、「女学雑誌」に寄稿した新渡戸稲造、渡良瀬川の鉱毒で犠牲となる人間や植物や魚類や虫たちの「いのち」の蘇生を求めて、ともに戦った内村鑑三、札幌農学校出身の者たちが愛読しつづけたイギリスの評論家、カーライル（T. Carlyle, 1795年～1881年）、また、北村透谷（1868年～1894年。明治女学校で1893年に教鞭をとった¹⁾。）に影響を与えたアメリカの思想家、エマソン（R. W. Emerson, 1803年～1882年）のことなどが綴られている。しかも、この人たちや書物などはキリストに倣って真摯に生き、キリストを仰いで信仰を深めること、父なる神と強く結びつくことの素晴らしさを教えつづけたものである。そして彼はこれらとの交わりを晩年まで続けていたことを知らせている。

しかし、彼がかかる人々と信仰をもって交わり、祈り、「潔癖なる日々」を貫きつづけたことを了知していた人々は少なかったようだ。1907年6月、巖本が校長（巖本は1892年就任）をしていた明治女学校で教鞭を執ったこともあった島崎藤村（1892年9月～1893年1月、1894年4月～1894年12月、同校に在職）が「文章世界」に「黄昏」という作品を発表した。これは巖本が同校を辞任してから3年後の

ことである。この作品のモデルは巖本善治だと言われている（野辺地清江著『女性解放思想の源流—巖本善治と『女学雑誌』—』校倉書房、1984年、205頁）。藤村（1872年～1943年）はモデルの彼を「変節者」「敗徳漢」と見なし、「あらゆる汚名を蒙つて、全然昔とは別人のやうに世間から思はれて居る」（『藤村全集』第3巻筑摩書房、1967年、250頁）との世評を記している。そしてその世評の原因を以下のように記す。

男は彼是四十に近い、女は二十五六である。男が今奈何いふ事業を為て居るか、昔の友達で答へ得るものは無い。女の居所は其親ですら知らなかつた。恰も何処かの薄暗い軒下から飛出す蝙蝠のやうに、斯うして夕方になるとぶら／＼散歩に出掛けるのは斯の二人の癖である。

男は、ずっと底の抜けた人に生れて来るか、さもなければ、一層性来拙いか、どちらかで有つたら、と思はれる一人で——其証拠には、彼よりも他に迷惑を掛けて居ながら、それで其様に悪く思はれない者も有るし、又は彼ほどの器量が無く、更に信用されて居る人も有る。然しながら、物を感受^{うけいれ}ることの速い、呑込^{のほ}の好い、直に火の燃え易いやうな性質の為に、彼はあらゆる社会のことを経験した。慈善事業もした。新聞も書いた。社会運動もやった。青年の味方となつて演説をして歩いた時は、驚くべき才能を發揮したといふことである。世が変るに伴れて、彼も亦た変つた。それから鉱山^山に關係したといふ噂もあるし、樺太へ人夫^夫を送つて手を焼いたといふ話もある。彼は真逆方に世のどん底へ落ちた。若も変節の為に斥けられるなら、暖簾を掛替へ

たものは彼ばかりでは無い。いたづらで咎められるなら、身を持崩したものは、世に数へきれない程ある。彼のやうに爪弾きされるとは、抑々何故だらう。そこがそれ、彼の人格にある。社会から捨てられるやうな辛い目に逢ふものは、いづれ一度は可愛がられた人だ。実に彼の生涯は、正義と汚濁と、美しいことと悲しいこととの連続した珠数のやうである。

(同書、249頁～250頁)

巖本は藤村が記すように、「啓蒙家」として、また、弱い者の痛みを心に寄せ、その痛苦を除去する「社会改良家」として社会から迎え入れられ、人々から賛辞を得たのはじじつである。しかし、その彼に向けられた世間からの高い評価は彼の身近で生じた苦悩や寂寥の大きさ、また、明治国家が「社会改良」を容認させないほど強権・強大化していくところで維持されにくかった。

彼は1896年2月5日に心血を注いで携わった明治女学校（東京麹町区下6番町）を類焼させ、同月10日に同志で、伴侶の賤子を心臓麻痺で帰天させた。善治はこの悲痛・絶望を超えて、1897年4月に多くの支援・協力のもとで同女学校を東京府下北豊島郡巢鴨村に新築、移転させた。また、精神的、肉体的な消耗を来しつつ、同校の再建を果たした1898年からは足尾銅山の鉍毒で死に瀕した渡良瀬川沿岸の惨状を世間に知らせる言論活動に勢力を注ぎ、国民の関心を渡良瀬川沿岸へと向けさせた。しかし、その惨状を克服して、種々のいのちが再生することを求めた活発な「公害除去活動」も日露開戦（1904年～1905年）への気運が全国で高まるにつれ、次第に下火となり、巖本たちの活動に対する関心も弱まっていった（拙著『巖本善治』、138頁～163頁）。

彼は「女学雑誌」の主筆を降り、明治女学校校長を辞任した。それは「潔癖」な彼が下した「最も善しと信ずる所」の決断だったのであろう。そして彼は沈黙した。

藤村はその沈黙する彼に向けて、ルサンチマン（ressentiment）をもって「黄昏」を表した。そしてこの小品は藤村の上司であり、媒酌人（1899年、藤村は秦フユと結婚）であった彼を社会から葬り去るだけの衝撃を持つものであった。藤村は「社会から捨てられるやうな辛い目に逢ふものは、いづれ一度は可愛がられた人だ」と、屈折した「優者」への憎悪を記述している。巖本は「憧れの存在」であったが、しかし、その存在を貶めたいという衝動をも、藤村の内には在ったようだ。しかも、その「優者」を汚し、引きずりおろす「話題」が明治女学校辞任前後の巖本の周りにあった。それは巖本の「女性関係」を取りざたすることであった。優れたキリストの愛の行実家であり、亡き賤子を「久遠の人」と慕う巖本が「女性問題」を起こしたとの噂が囁かれる。しかし、その噂の「真相」は分からない。それだけに、その噂は面白おかしく、曲がりくねって広がっていったのだろう。

巖本と交流のあった文学者柳田泉たちは1961年に『座談会明治文学史』を岩波書店より発行した²⁾。その中で、明治女学校出身で、看護学を志した坂木夏子のことが語られている（225頁～226頁）。彼女は米国留学後、巢鴨に移転した明治女学校で教員をしていたようだ（相馬黒光著『黙移—明治・大正文学史回想—』法政大学出版局、1977年、96頁）。その彼女が巖本の「浮説」の相手であり、また、彼女が治り難い病にかかったために、巖本は彼女を「捨て」、その「関係」は破局を迎えたと言われている（『座談会明治文学史』、226頁）。

その真偽のほどは分からない。

しかし、巖本は治り難い病の女性、嘉志子（若松賤子）と結婚している。嘉志子は結婚する前に肺結核を患い、周囲はこの結婚を反対したが、巖本はそうした反対を押し切って1889年7月に結婚し、病弱な妻と彼は相互にそれぞれの力を引き出しあって、文学に、教育に、社会改良に尽瘁し、貧しい生活ながらも3人の子どもも授かった（巖本善治著「撫象座談」〔明日香〕12月号所収）古今書院、1936年、17頁）。善治の長女清子は父と母について以下のように語っている。「家庭の外では知らず、父は母の死後ずっと唯だ母の床しい熱情的な追憶にのみ生きて居たので、父の追慕の言葉が余りにも生まましく人間的で濃厚な時には「まあいやだ」といつて鬨聲し抗議したものである。（中略）また母ほどにも父を神聖視し崇拜し、宛ら殉教者の様に奉仕した人は少ないであろう。父に対する信頼は絶対であり、結婚生活は霊と理想との信条の上に樹てられて居た」（中野清子著「母のおもかげ」〔若松賤子集〕所収）富山房、1938年、9頁～10頁）と。彼らはこの世を「神の国」、人々が喜びをもち、認め合って生活できる社会の出現を求めて生き、生と死を超えて、神の恵みの内で、いつも、ともに永遠に結ばれて生きあっていたことを証言している。

巖本は「撫象座談」で、キリストを知る前は懐疑的で、厭世的であったが、1883年4月に、木村熊二より受洗した以降、そのニヒリズムは払拭され、神の恵みの内で生きる信仰の喜びを知った。そして自らの「人生の価値と目的」をつかんだという。さらに、この神の赦しと恵みは嘉志子との結婚生活で明瞭、確実に知らされ、自らの人生の目的へと積極的に歩ませていったと回顧する（16頁）。けれども、その歩

みの日々はキリストのように忍従し、悲哀と苦難を積極的に引き受けることであった。これはカーライルや新渡戸や内村と共通した信仰者としての生きる態度でもある。

内村の弟子、矢内原忠雄はこの信仰に基づく態度について、藤井武から伝えられた次のようなことを記している。「数寄屋橋教会の創立四十周年の祝賀会に内村が招かれて行きました。さきに演壇に立ったある有名な牧師が、内村の前にして無教会主義の攻撃をした。藤井〔武〕ははらはらしてそれを聞き、内村が壇に登れば、どの様に痛烈な反撃を食わずであろうかと、固唾をのんで待っていたところが、順番が来て先生が登壇し、静かに、「池で子供らが遊んでいた。たまたま水中に蛙を見つけ、石を拾って投げつける。憐れむべき蛙は打たれる度毎に深く水の中にもぐって、或るひとりの者にすがりつく。そうしてその者に慰められて、傷はことごとくいやされる。」という話をされた。暴に報いるに暴をもってせず、暴言に報いるに暴言をもってせず、暴言に報いるに無抵抗をもってされた」（『矢内原忠雄全集』第24巻岩波書店、1965年、586頁）と。

矢内原は罪を贖い、赦すために十字架上で亡くなるイエスと陰府に下り、三日後に死を超えて復活（anastasis）する救いのキリストに「すがりつく」内村の信仰姿勢を伝えている。内村にも、十字架で叫ぶイエスの言葉、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」（マルコによる福音書15・34）が聞こえていた。愛の実践者、イエスは社会から捨てられて、孤絶の内に十字架上で亡くなっていった。そのイエスが表した従順で、しかも、凄惨な死と復活に至る姿はこの世にある種々の苦難、絶望、無力感に打ちのめされて倒れふす人々の下に降り

立ち、そしてそれらすべてを、イエスが身代わりになって引き受け、そこにある苦渋、絶望の闇を打ち消して、復活し、この世に希望と蘇生の光、また、生きる力をもたらすものだとして知ることができる (D. Bonhöffer, *Letters and Papers from Prison* (London: SCM Press, 1981), 127~130)。内村はこの十字架のイエス・キリストにより縋り、キリストの無抵抗に倣って苦難と悲哀を引き受けて、耐え、神への祈りとキリストの加護をもって歩もうとした。その内村の信仰姿勢を、藤井は以下のように告げる。彼は内村の無抵抗をイザヤ書50・6「打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた」をもって表したのちに、次のように語った。「先生〔内村〕に一つの見えざる世界があつたからでありました。ひたすらの或る者に縋りついて、その声を聴くところの世界があつたからでありました。イエス・キリストは朝ごとに先生を醒ましその耳をさまして、教えを受くる者のやうに聞くことを得させたまうたのであります」(『藤井武全集』第10巻岩波書店、1972年、166頁)と。

無抵抗の内村が「縋りつくイエス・キリスト」に「朝ごとに」心身すべてを醒まされていたように、ひたすら沈黙する巖本もまた天上にあるイエス・キリスト、先に天へと召されて行った人々と対話し、慰められ、生きる力を与えられていたようだ。「撫象座談」で、「其後〔賤子死後〕私は妻を貰ひません。妻の霊とかうして賑やかに暮してをります」(19頁)と告げている。

藤村のルサンチマン的な巖本攻撃、屈折した「劣者」が憧憬の存在を貶める表現方法は巖本の無抵抗な沈黙のもとで成果をもたらさず、ただ、「浮説」だけが水面下で広がってゆくだけ

であった。そしてこうしたルサンチマン的な巖本攻撃は間欠泉のように明治女学校卒業生からも現れることがあった。

二 羽仁もと子・相馬黒光の「巖本善治像」

羽仁(松岡)もと子(1873年~1957年)は明治・大正・昭和の日本社会で活躍した明治女学校の卒業生であった。このもと子は巖本善治の「道統」に連なる存在であり、善治の言論活動(『女学雑誌』)、教育活動(『明治女学校』)をモデルとし、彼の実践、思想をヒントとして『婦人之友』(1908年)を創刊し、『自由学園』(1921年)を開設した。巖本はもと子にとって「憧れの人」であった。彼女は巖本の人生の後を追ひ、彼の思想・実践活動を乗り越えて、それらを発展させようとの意気込みを持ち続けていた。そしてその憧憬は東京府立第一高等女学校卒業(1891年)後に生まれ、保たれていた。

もと子の出身地は青森県八戸であった。彼女は上京して同校で学び、卒業後もなお継続して学習する意志を固め、自活して学べる学校を探していた。そして彼女はその条件を満たし、願いをかなえてくれる可能性のある人物を見出した。それは「女性の自立・自活」を支援する巖本、そして彼が関わる明治女学校³⁾であった。彼女は巖本に手紙を書き、勉学したい旨を告げた。彼はその懇願を聞き入れ、明治女学校入学とその寄宿舎に入ることを許した。それとともに、一定の給与のでる仕事(『女学雑誌』の校正、巖本たちの使いなど)を用意し、授業料を免除し、そして寄宿費などはそれで賄えるように配慮した(『羽仁もと子著作集一半生を語る一』第十四巻婦人之友社、1969年、51頁)。彼女はそうした巖本の恩情を踏まえて、1928年に刊行された『半生を語る』(婦人之友社)

で語る。

明治女学校と巖本先生は私の恩人また恩のある学校である。また私の生涯に劃時代的な進歩を促してくれた学校である。また私はその短かった全盛時代に、そこに置かれたということも感謝すべきことである。私は今もすでに滅び去った明治女学校を忘れることが出来ずにいる。あの爛漫たる才華のなかに、理もあり情もありながら、生ける信仰を欠いていた。その聡明さはキリスト教思想を解していても、本気に神に仕えようとはしていなかったであろう。そのために美しい学校がとうとう魔の国へさらわれて行ってしまった。(『羽仁もと子著作集』第十四巻、61頁)

彼女は素直に明治女学校と巖本に対し「恩のある学校」「恩人」と述べている。じじつ、彼女は寄宿舎生活でこれまで体験したことのない規則正しい、合理的な生活の素晴らしさを知らされ、巖本の使いで「名士」を訪問したり、「女学雑誌」などを校正する実務から新鮮な喜びを味わわされたりした。また、巖本が理性的な思慮と強韌な意志をもって、教育活動、言論活動を展開してゆく行実から多くの知恵・示唆を与えられた(同書、52頁～59頁)。彼女は「聡明」で、「理もあり情も」ある教育環境で育ったのである。しかし、この巖本の思想・実践と明治女学校での学び・実務・寄宿舎生活を栄養として成長、発達してきた彼女は明治女学校校長を辞職した以降、沈黙を続ける巖本に対し、彼は「本気に神に仕えようとはしていなかった」と、巖本の信仰生活を非難した。また、明治女学校は巖本の「女性問題」が起因して「魔の国へさらわれ」、同校を廃校(1909年)へと追いやったと、その責任を問うている。

婦人ジャーナリストの草分け、大正自由教育の推進者として賞賛される彼女(相馬黒光著『黙移』、105頁)は1928年の『半生を語る』で、沈黙を守り、教育界・言論界と関わりをもたない彼を侮蔑するのである。弟子は師を越えたと錯覚したのだろうか。師が再び如上の世界で活躍することを願い、求めたのだろうか。巖本への「憧れ」「恩義」は屈折し、「憐れみ」をも含ませている。しかし、『半生を語る』は「師より優位に立つ」とも子の「傲岸な」姿を一貫して綴っていない。「弟子」の巖本への憧れは見え、隠れする。

その「見え、隠れ」は彼女が同書に書いた東京府立第一高等女学校卒業後の進路についての文章からも窺われる。「そこ[明治女学校]には、女学校の卒業者も入る三年の高等科がある。私は間もなく女高師のことを忘れてしまって、ただどうかして明治女学校の高等科にと考えた。(中略)明治女学校に入学してから、第二回目の夏休みになって私は国に帰った。(中略)どういふ事情がそのまま私を郷里に引きとめたのか、どんなに考えても思い出せない。とにかく私は間もなく小学校の教師になった」(『羽仁もと子著作集』第十四巻、50頁～51頁、59頁～60頁)。

この文章が後のもと子「年譜」に間違いを生じさせていったのである。彼女の「年譜」を丁寧作成した『全国友の会創立60周年記念』(婦人之友社、1990年、44頁)や『永遠の教育者羽仁もと子』(八戸市立図書館、1976年、115頁)もまた東京府立第一高等女学校卒業後の1891年に明治女学校高等科に入学したと記している。そして1892年に八戸へ帰省し、八戸尋常小学校の訓導(1893年1月)に就任したと記述している。

けれども、巖本の「女学雑誌」はもと子が

1892年7月19日に明治女学校速記を卒業したことを報じている。同校の教育の根幹は普通科、高等科であるが、1890年ごろより、つぎつぎとこれら以外の新設学科（速記科、師範科、職業科、主計科、武道科など）、つまり、「新聞社、小学校、会社、銀行、商店」などで勤務する「職業婦人」を養成するコースが現われだし、もと子はその一つである「速記」を卒業したのだろう（『女学雑誌』第323号乙の巻女学雑誌社、1892年、24頁～25頁。「女学雑誌」第208号女学雑誌社、1890年広告欄。「女学雑誌」第249号女学雑誌社、1891年、広告欄）。そして「女学雑誌」第324号乙の巻（女学雑誌社、1892年8月6日発行）は「松岡もと子齊藤ふゆ子の二氏は新に高等科に編入せられし」と伝え、もと子が1892年7月の卒業後、高等科へ入学することを許可されたと報じている（24頁）。

しかし、もと子は仙台出身の齊藤ふゆ子（相馬黒光著『黙移』、75頁～83頁）と一緒に高等科進学が認められたのだが、『半生を語る』が記すように、1892年の夏に八戸へ戻り、明治女学校へ戻らなかった。それ故、彼女にとって、この高等科での学習が果たされなかったことは無念であり、いつまでも悔いは残りつづけ、余人にこのことを語りたくなかったのだろう。もと子の『著作集』第二十巻で、もと子の三女羽仁恵子は、もと子は「〔東京府立第一高等女学校を卒業後〕更に二年ほど、キリスト教主義の明治女学校に学ぶ」（『羽仁もと子著作集』第二十巻婦人之友社、1963年、372頁）と、在学期間の曖昧さを残して「解説」を記している。

明治女学校へのもと子の「憧れ」はいつまでも残り、その「存在」を峻厳に拒絶させるまでにはいたらなかったようだ。彼女は巖本の「浮説」が流れる中でも「明治女学校高等科」と「巖本善治」に対する憧憬を消せず、抱き続けた

のだろう⁴⁾。

こうした巖本の「女性関係の浮説」は同校卒業生たち、あるいは、その周辺に残存し続けた。そしてこの「浮説」を通して、彼女たちは若き日に学んだ明治女学校、また、一世を風靡した巖本を想起したこともあったようだ。明治女学校出身者で、新宿中村屋の相馬黒光（1876年～1955年）も、この「浮説」に囚われ続けた一人であった。彼女はこれを心の底に置いて彼女の著書『黙移』を1936年に上梓した。これはもと子が『半生を語る』を出版してから8年後のことである。黒光は綴る。

私の印象に基いて申しますと、先生〔巖本〕は丈高く、血色美しく、うるおいのある大きな鮮かな眼が、何かを深く凝視するような光りを帯びて、いつも静かにみひら睜かれています。その見事な鬚髯、やや厚く色あざやかな唇、およそ男性的なあらゆる美を備えた姿を壇上に運んで、教えを聴く者の眼に、その強い眼を絶えず与えながら語りだされる時、その声がまた実に沈痛なひびきを帯びていました。私が在学のころ、先生はそういう態度をもってスペンサーの教育学を講じ、そのほか講話の時間があって、これはまず普通の学校でなら校長先生のお修身というところで、たいていは無味乾燥にきかれてしまうものが、先生の場合は大変な違いで、みなその時間がくるのを待ち、お話がすんで講堂を出てくる時は、誰も誰も眼をかがやかせ、人生のよろこびを深く感じ、ある時はまた先生の非凡な才気に全く敬服して、この学校に來たことの幸福を今更のように強く感じて、うつつの如く足を運ぶというふうでした。（中略）そういう魅力のある先生に対し、魅力の

乏しい古い世界から出てきている教え子達は、ただもう一途に憧憬を寄せ、求めていた完全なものをここに得たかの如くに、安心しきって、校内の空気に身も心も委ねてしまったようなところがあります。そしてついに中心人物の失脚となりました。こういう複雑な事態の前では、男性が女性を過ったのか、女性が男性を過ったのか、事実はどう現われたにせよ、その真相は、にわかには断じ難いものがあります。(『黙移』、55頁～56頁)

相馬は師匠、巖本の魅力と、同時に人間としての不完全さ、弱さをなるべく冷静に描こうとしている。彼の講話の魅力、外観の美しさ、弱き世界への支援などが人々の注目を集め、彼への憧憬を高めたと述べている。そしてここには、侮蔑や憤怒は余り無く、人間がもつ弱さへの同情と「魅力ある存在」が陥りやすい危険性が描かれるだけである。そしてこれは人間の「醜さ」「根本悪」を凝視し、抗いつづけた黒光らしい「巖本描写」であろう(拙著『闇を照らした人々―相馬黒光・山室軍平・石井十次・井口喜源治論―』新教出版社、1992年、37頁～42頁)。羽仁も、相馬も、巖本の「風説」に心を乱されることがあっても、それをもって徹底して巖本を非難し、彼のすぐれた行実を全面的に否定するまでには至らなかった。この『半生を語る』『黙移』は明治女学校の関係者に巖本の「風説」を思い出させただろうが、それ以外の人々にまで広がることを禁じる理性的な配慮をもって認められている。

巖本の行実を高く評価する神崎清は1939年に上梓した『女学校ものがたり』(山崎書店)で、巖本と明治女学校の意義について多くの頁数をさいて紹介している。その中で、彼は次のように記す。「今日でこそ巖本善治の名を知る

人は極めて稀であるが、明治二十年代に於ける彼の存在は、最も敬虔なクリスチャンとして植村正久や内村鑑三と肩を並べ、最も活動的なジャーナリストとしては徳富蘇峰と勢ひを競ひ、最も良心的な社会改良家としても島田三郎や石井十次と列を同じうし、しかも、女子教育界に於ては、彼に対抗するに足るほどの有力な人物はない」(255頁)と記述し、巖本が1939年ごろ、既に「忘れられた人」だとして描いている。それは『半生を語る』『黙移』がこの書物と同じ頃に出版されても、巖本の「浮説」は彼ら関係者周辺で語り続けられるだけだったようだ。

また、巖本を終生支え続けた青柳猛(有美)の息子、青柳安誠(医師、京都大学名誉教授)は1955年の毎日放送で「母のこと」を語った中で次のことを述べている。「明治女学校と申しましても、今の方々には、てんで、どんな学校であるかは想像もつかないと思われませんが、島崎藤村の小説『春』の中に出てくる女学校でありまして、当時の日本においては、女子に対して進歩的な高等教育を受けていた日本唯一の女学校でした。今のヴァイオリニスト巖本真理さんのお祖父さんの巖本善治先生の、私塾的な学校でありまして、この学校に関する詳しいことは、やはり母と同じ頃の生徒でありました、新宿中村屋の老主人相馬黒光女子の『黙移』という著書をお読みになれば、実によく書かれておりまして同時に当時における女学生気質というものも如実に知ることができます」(『Petit 忘れえぬ人々』金芳堂、1963年、86頁～87頁)と。明治女学校、また、巖本善治は1955年ごろには人々の関心からはるか遠く隔たった処にあり、その巖本の「浮説」は人口に膾炙するものではなかった。

「浮説」はいつまでも明治女学校関係者の中

に残りつづけるが、巖本は教え子たちの慶弔の場には、明治女学校を退いた後も出かけていった。「撫象座談」(1936年12月発行)は巖本が『黙移』の出版記念会に出席したことを告げている。「頃日相馬黒光ぬしの著「黙移」出版記念会の末席〔塩田良平〕を汚せし折ゆくりなく撫象巖本善治先生に拝俛す」(10頁)と。巖本は如上の世界に対して沈黙をつづけるが、ただ、教え子たちの成長・活躍や彼らの悲しみや苦悩を静かに見まもり、祈りつづけていた。彼は教え子の墓参もしていたようだ。1938年11月の巖本あての山室軍平書簡は、山室軍平の妻で、明治女学校の卒業生、そして日本における初期救世軍の伝道活動を担い、1916年7月に帰天した(佐藤)機恵子の墓に参ったことを告げている(『山室軍平選集』X「山室軍平選集」刊行会、1955年、164頁)。彼が教え子たちにそそぐ慈愛は変わることも、尽きることもなかった。彼は真摯に展開した人格主義的、理想主義的な教育を継続、発展させられなかったが、如上の世界から退いたのちも、キリストに縋り、赦しを請い、導かれつつ、彼女たちの日々が祝されることを祈り続けていた。

三 おわりに

巖本が明治女学校を辞任した後は塩田良平によると、「明治殖民合資会社、或は帝国製油会社等実業界の人と」(塩田良平著『近代日本文学論』、134頁)になったという。津田仙の学農社(1880年～1884年)で農業を学び、経済は「富を造る道」でなく、「人を造るの道」、道德的、教育的意義をもつもの(拙著『巖本善治』13頁、120頁～121頁)だと捉える巖本は実業界で「人造り」「国家造り」に寄与しようとした。そして1942年10月6日、「変節者」「敗徳

漢」とひそかに言われ続けた巖本は帰天した。告別式は同月8日、巣鴨の自宅で執り行われた。その日のことを、黒光は次のように記している。「午後〔黒光の夫、相馬愛三が〕巖本先生の告別式に参列。有美先生わざわざ大阪より出京、布川先生柳田泉氏神崎清氏にもお会いした由」と。また同年12月1日の条は「近藤夫人、私を気遣つて来訪、フェリス同窓会で木村香芽子夫人(故駿吉氏夫人)〔巖本の妹〕に会ったが、如雲先生〔巖本善治〕逝去の際、弔問客に接する人がいないので、夫人が代つて挨拶された」(相馬黒光著『滴水録』相馬安雄、1956年、280頁～281頁、287頁)と。近代西欧精神(=キリスト教)の受容と応用をもって理想的な人格教育を明治社会で誠実に、果敢に展開した「スーパースター巖本」の葬儀は自らの役割を果たして去ったのち、キリストに縋って祈り、沈黙して生きた倫理的骨格の堅固な人物らしい細やかなものであった。

註

- 1) 北村透谷は1893年1月に島崎藤村に代わって明治女学校に就任した。そして1893年10月はまだ透谷が同校で勤務していることが伝えられるが、同年12月31日付けの同校「教員名簿」には、透谷の名は既になかったと、「北村透谷年譜」は記す。(『透谷全集』第三巻岩波書店、1955年、617頁～623頁。)
- 2) 巖本善治の葬儀が1942年10月8日、東京巣鴨の巖本の自宅で執り行われた際、その葬儀に、柳田泉も参列したことが相馬黒光の『滴水録』(281頁)に記されている。柳田が巖本に大きな関心を示していたことが分かる。
- 3) 巖本は1887年3月に明治女学校教頭に就任し、1892年に木村熊二校長に代わって校長となった。
- 4) 夫羽仁吉一ととも子の雑誌「家庭之友」は内外

出版協会から1903年4月3日に創刊された。この雑誌の創刊前日に誕生した長女羽仁説子の名づけ親は巖本善治であり、また、「家庭之友」創刊号に善治（「如何にして家族的交際を盛んならしむべき乎」其一）、長女巖本清子（「少女日記」）が文章を寄せている。もと子がいかに巖本善治を尊敬し、師と考えていたかがここによく示されている。（「家庭之友」第一巻第一号内外

出版協会，1903年，4頁～5頁，23頁～26頁。
「家庭の友」第一巻第二号内外出版協会，1903年，67頁。拙稿「羽仁もと子，吉一論—家庭と子どもと婦人—」（『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』所収）新教出版社，2001年，218頁～219頁。羽仁説子著『羽仁説子の本』IV草土文化，1980年，27頁。）